

間宮芳生「ポポイ」

脚本も音楽もクール

間宮芳生の音楽は民謡抜きに語れない。そんなイメージを、新作「ポポイ」はあっさり裏切った。80歳ならではの軽みと言おうか。現代オペラへの挑戦にも力まず、自らまとめた脚本も、自在に綴られた音楽もクールだ（6月28日、静岡音楽館AOI）。

原作は倉橋由美子、87年の近未来小説。科学技術により首から上だけで生きる青年ポポイと、世話をする深窓の令嬢、舞の交流がテーマ。「天守物語」の獅子頭や「サロメ」のヨカナーンのように、生首はおどろおどろしくも独特の華があり、ある意味オペラ向き。だが、頭だけのポポイは全く動けず、植物的な存



仕掛けにあふれた「ポポイ」の舞台||日置真光氏撮影

在だ。

主眼はあくまで舞の心の動きにある。無邪気な残酷さを持つヒロインを演じた吉川真澄は、少女っぽさを残した細かい声で全編、歌いっぱなし。最後に首を死へと至らしめる彼女の行為が、哲学的思索の果てではなく、淡い愛情のゆえだと思わせたのは、間宮の書いた優しいメロディーのためだろう。ポポイ役にカウンターテナー（上杉清仁）、祖父の入江役に能楽師（清水寛二）を配したセンスもいい。

薄気味悪い設定にもかかわらず、奇妙に清澄な文体の倉橋ワールドさながら、間宮の筆は透明度の高い響きを紡ぎ出す。シンセサイザーを含む小アンサンブルは作曲家自身の指揮でバロック風の典雅な音楽、能楽風のアシライ、ドビュッシーの引用など、複数の様式を溶け合わせていく。みごとだったのは田中泯の演出。大きな仕切りを軽快に移動するだけで、空間が変幻自在に形をかえ、聴き手の想像力を作動させた。脳死判定や安楽死など、背後には社会的問題もちらつくが、示唆するにとどめたのは原作の意に沿うもの。あれこれと想念が広がる一夜だった。

（白石美雪・音楽評論家）